

本書に収められた『どうしてそうなったのか分からない』と、『山の巨人たち』は、ピランデッロの最晩年の二作品です（後者の第3幕は、劇作家の死によって書かれることなく、息子のステファノが父親から聞いた構想の要約があるばかり）。

『どうしてそうなったのか分からない』（一九三五年）の方は、これまで日本では紹介されることがなかった作品で、裕福で幸せな生活を送っていた主人公が、無意識の世界に根を張っている《生》の力「本能の力」のせいで、自分では思ってもみなかった行為を犯してしまい、意識が戻ってその恐ろしい結果を目にした時に、その責任をどう負うべきかで錯乱し、最後にみずから破滅するドラマです。ギリシア悲劇を想起させるこの作品は、きわめて複雑で、繊細で、しかも重い心理劇ですので、読者は一読された後で、巻末の作者解説と付き合わせて、ご自分の解釈が当たっているかどうか（あるいは、訳者の解釈が間違っているかどうか）を確かめてみてください。

い。これは、訳者でさえも自信を失いそうになるほどの、ごつい作品でした。

このドラマが、セリフの意味とニュアンスを用心深く解釈しなければならぬ作品だとすると、『山の巨人たち』はその逆で、心を——無責任にでいい——解き放って、目の前に展開する不思議な現象を、じつくりと眺めて、受け入れて、楽しまなければなりません。たとえどのように奇妙な登場人物が、どのように奇妙なセリフを吐こうとも、あらゆる疑問を捨てて、そのセリフをそのまま受け入れてください。そうすればアリスが、人間の言葉を話しながら歩いて行くウサギを追いかけて、不思議な国に迷い込んだように、自然にピランデッロの不思議な脳内空間に入り込むことができるでしょう。そこには、彼の創作活動のインスピレーション源となったすべのものが、魔法のように湧き出しています。現実の世界と空想の世界の境にある彼の《不運の館》^{ラスカローネ}は、奇妙な風体の《不運な人々》^{スカロニヤイ}や、操り人形や、幽霊たちの住む、残酷と迷信のない交ぜになったフォークロアの世界です。ピランデッロは、それまでの作劇法（少数の登場人物の緊迫した対話の積み重ねによる現実世界のドラマ）と違って、夢と現実の多様な要素を入れ込んだ《集団劇》^{テアトロコラレ}を試みています。その結果、舞台は軽快で賑やかなヴァラエティー・ショーのような祝祭劇となって、夢と現実が渾然一体となった彼の空想力の世界が見事に表現されているように思えます。以上のことが、『山の巨人たち』は未完の遺作でありながら、彼の晩年を代表する傑作となったゆえんであると、訳者は考えています。

また『山の巨人たち』では、彼のオペラ・リブレット『取り替えられた子供の話』の一部が、劇中劇として演じられています。それがどんな内容の話なのかを知っていただくために、資料として巻末に全訳を付けておきました。

二〇二四年六月十六日 検査入院の日

斎藤泰弘